関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

諸沢 巖さんを送る

その他のタイトル	Danksagung an Prof. Iwao Morosawa
著者	渡辺 有而
雑誌名	独逸文学
巻	49
ページ	1-2
発行年	2005-03-19
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018047

関西大学『独逸文学』第49号 2005年3月

諸沢　巖さんを送る

渡　辺　有　而

中国は晋の時代、王質という名の木こりが山中で碁を打っている4人の童子に出会い、好きな道のこと、早速傍(おか)目八目を決め込んだ。ふと気がつくと斧の柄が腐っており、不審の念に駆られて山を下ってみると、自分の家は跡形もなく、村人たちの中に見知った者は一人もいなかった。これは言うまでもなく、浦島太郎やリップ・ヴァン・ウィンクルと同型の説話であり、柯(か)（即ち斧）が爛(くさ)ることから爛柯(らんか)という成語が生まれ、碁などに熱中して時を忘れることを指す。

諸沢さんがフンボルト財団の給費留学生としてシュトゥットガルトに滞在していたころ、土地の知人に乞われてその娘さんに囲碁の手ほどきをした。氏の巧みな指導が彼女の才能を引き出し、僅か2年で2段を取った彼女は後にヨーロッパ囲碁選手権に出場するという急速な成長を遂げた。当時まだ無段であった氏は弟子の活躍ぶりに発奮し、関西棋院直属のその名も「爛柯」というクラブに加入して研鑽を積み、10年足らずで4段の資格を取得した。ちなみにアマチュアの最高位は以前は6段、現在は8段である。

登山もまた諸沢さんが年期をかけて取り組んできたものの一つである。立川高校時代、上級生の横暴が目立つ山岳部に対抗して自由な雰囲気で登山を楽しむ山岳同好会を作り上げた氏は、国内の3,000メートル級の山々をすべて踏破し、特に丹沢山系の沢登りを好んだ。山で鍛えた体力と気力が、碁で培った状況判断能力と相俟って、氏の41年間に及ぶ関大での活動の源となったことは疑いを容れない。23年前に私が本学へ赴任して以来、水戸にゆかりのある者同志として、1歳年長の諸沢さんには非常に親しくしていただいた。しかし不思議にも水戸っぽ特有の圭角が氏には微塵もなく、微笑みを絶やさぬ穏やかなお人柄は、学科内の和を図る上で無くてはならぬ存在だった。時折カラオケで披露した「波浮の港」などの藤原節や古賀メロディーには、氏の燻し銀のような人格が滲

み出て、今も記憶に新しい。人学と併称されて最も負担の重い人事委員と学務委員を通算10余年務め、その実務能力には学科一同が全幅の信頼を寄せていた。外国語教育研究機構に移った後も、教務委員の激務を退職するまでこなしたことには、感嘆の念を禁じ得ない。

5年前に行われた文学部の第1次改組の際、独文から新機構へ移籍するべき4人のうちの2人が容易に決まらず、教授会や人事委員会で独文への批判が続出し、遂に学部長が候補者の説得に乗り出すという異常事態を招いた。このとき人事委員の氏は学部と学科の板挟みとなって苦慮した末、自ら移籍を申し出て事を解決に導いた。もとより外国語教育研究に関心が深かったとは言え、新しい組織を作るという心身の非常な労苦を伴う任務を65歳にして進んで担った無私の行動は、学科構成員たちの感謝と尊敬を集めるに十分であった。だがその後学部内、学科内に問題が生じるたびに「諸沢さんがいてくれたら」という嘆きの声が起きたのも事実である。

氏は早くも高校時代に、谷崎潤一郎の甥に当たる東大独文科出身の英語教師からドイツ語を学んだのち、星野慎一、桜井正寅、京野季吉らの名物教授が居並ぶ東京教育大学独文科へ進み、再評価の機運にあったヴィルヘルム・ラーベを生涯の研究対象と定め、みごとに一貫してその道を歩み続けた。審査を要する外部の学会誌への論文掲載や学会発表こそ無かったが、自他共に認めるラーベ研究の専門家であり、傍ら高雅な趣味の世界に生き、学部と修士課程に計11年在籍して自由な学生時代を存分に謳歌した諸沢さんは、名利に恬淡とした古き良き時代の大学人の貴重な名残りと言えるだろう。

定年延長期限を前にした今、氏は大学で過ごした長い日々を顧みて「一瞬のことでした」と述懐する。その言葉に私は痛いほどの共感を覚える。これを爛柯の思いと呼ぶべきか。共に一病息災の身を養いつつ長寿を保ち、何年か後に氏と烏鷺の争いを楽しみたいものである。山中の童子の如く、隠者の如く。

諸沢さん、長い間本当にご苦労様でした。キケローが称揚したような青壮年には真似ることのできない充実した老年期を過ごして下さい。どうかお元気で。